







G A R I G A R I 32







■……。今日がいつだと思っているの？  
これで本当に本が出ると思っているのかしら？(黒猫風)

■こんにちは、アレマテオレマの小林由高です！  
本当は冬コミで出せたらなあ、  
と思っていた俺妹・黒猫本、やっと出せました〜。

黒猫ですよ、黒猫！  
アニメも好きですが、小説の方の黒猫がたまらんです♥  
彼女から、東方のパチュエ嬢と何か似たものを感じます(笑)  
こういう子に弱いんか、私……。

後、密かに「スケ氏の年上の世話焼きっぷりにひかれてもいます。  
あれで「言葉攻めゆっくりDS」やったら最高です、はい。  
(どんなジャンルの人やねん)

■最近、ゲームをする体力がないので(涙)、  
ラノベを読むようになりました。  
平行して、平山夢明先生の本も読んでいる事は  
秘密にしておいた方が良さそうね。(黒猫風)  
「僕は友達が少ない」も読み始めましたよ。  
夜空とおっぱいねーちゃん描きたいです。  
ほがない本、増えるといいなあ〜。

それでは本文へどうぞ♥

小林由高(上野さん、ありがとうございました……!!!)



結構不健全な純愛?読み物

# 黒猫にやーにやー。

目の前に、明らかに怪しい宿泊施設がある。  
サービスタイム5時間4500円から。

「……本当に、いいんだよね?」

「……ええ、勿論よ」

ロビーへ向かうと、真ん中にドデンと  
各部屋の写真が貼られたパネルがあった。  
京介はこういう事に決して慣れてはいないが、

“中華なんか和風なんかハッキリせえへん、でも気持ち和風寄り”

の部屋は黒猫の為に避け、比較的高いめな洋風の部屋をセレクトした。

「202号室、2階だな」

黒猫は、さっさからずっと部屋の写真に食いついていた。

「何なのかしら、カオスなデザインの部屋がいっぱい…… 岩盤浴まで……」

「え、さっきの和風中華が良かった?」

「まっ、まさか……!!!」

202号室に向かうと、部屋の番号のランプがチカチカと点滅していた。

ドアを開け、黒猫を先に部屋の中へ通す京介。

※実際  
3日ぐらいかました。

「……  
カオスな  
デザイン  
の部屋  
がいっぱい  
…… 岩盤  
浴まで……」

……  
絶対  
フタが  
あかす  
……  
……

さっさと  
部屋へ……

「……」



「さ、避いたよ黒猫」

ガチャヨヨ。

「? 今、ガチャヨヨって言ったわ  
「お、音がかったんだね」

黒猫は、踵を返すとドアのノブを気の済むまでガチャガチャさせた後、  
何か一つの結論に達した表情を見せた。

「……そろ。」

## 「この私を閉じ込めようなんて…… いい度胸だわ」

「違う違う、ラブホは基本こうなの! 終わる迄出れねーんだって!」

「……ちょっといいかしら?」

急に黒猫の音が案に反ったので、何かと彼女の方を振り向く。

「え?」







「だって…… 前に先輩が『アナルセックスって気持ちいいのかなフビビ  
もしもしエロでいっちゃやるかーっ』って言ってたから……！」  
「ほか、ネタだよ、ネタ!!! エロゲーとか普通にしてるからっ!  
後『もしもしエロ』は関西の人聞しかわからないと思うっ」  
「……。そ、そうだったの……。」  
かあああ。

「黒猫っ……!!」

「……でも、したくない、とは違うからな、  
いや、むしろ、黒猫なら大歓迎だからなっ」  
「……!」

「ばっかだなあ、ここまでして…… どーせ洗浄とかも丁寧にしたんだろ……」  
「当然よ……。」

「私だって、先輩としたい……。」  
ぎゅ。

「……!!」  
ほわーん。

「いけねっ、エロ本だエロ本、  
ほわーんとしてページ噴ってる場合じゃない!」

「黒猫、今日はいいんだっけ?」  
ネクタイを緩める仕草はカットできない。アノットそのままの文章をお伝えします。  
「ええ、今日はなくて大丈夫……。」



「まずはこっちかな…… 久しぶり…… 黒猫の生まんこ……」

亀頭を黒猫のクリトリスから膣口に向けて前後に擦り付けると、  
先走りと愛液が自然と混ざり、  
ヌチュヌチュといやらしい音が聞こえはじめた。

「は……あ……、ヌルヌルして…… 凄……」  
「いいな……? それじゃ、生でいくからな  
ゆっくりと腰を動かすと、  
亀頭が黒猫の割れ目にめり込んでいった。  
アナルプラグのせいで膣口が狭くなっているからだろうか、  
いつも以上に黒猫の体が震えた。」

「ぐ……っ! せ、狭い……!」

「あ……! あアアアツ……♥」

「……はあっ……!」

黒猫は生のチンポが入る時、いつもこんなんだな……!  
「……だって…… 生のおちんらん…… 気持ち良すぎて……ツ  
どーせ男の貴方にはわからないわ……!」

「ほら、腰、もっと動かさず……!」

「あ……! あア!!!」

珍しく、黒猫が京介の体を手で押し返そうとしている。  
快感が強過ぎるのだから、  
顔は反面トトロ口に濡けきっている。  
こういうのを見てしまうと、  
京介は黒猫をもっともっといじめたくなるのだった。

「せんばあ……! そこ……お! 生で奥のコリコリやああ……!」

「ん? 奥は嫌? 止めようか?」

京介は、意地悪く腰をピタッと止めた。



「うら……!!」  
「……黒猫は、どうされたいの？」  
「……はう、うらうら……! お、奥……!」  
「奥が、何？」  
「……おっ、奥……!! おまんこの奥の子宮口……!!」  
「そこっ、生のチンポでコロコロして……ッ!!」  
「……“下さい”、は？」  
「……うっ、うらうら…… 下さいいい、おまんこしへえ、  
チンポで好きにくっゅんぐっゅして下さいいい……!!」  
「先輩の精液っ、子宮にいっぱいっ……!!」

精液の  
おまんこ  
に……

おまんこ  
に……

「びゅっ!」

京介が、黒猫のアナルプラグにちょっかいを出し始めた。  
「やあああっ!」  
「ほら、こっちも、覚悟できてるんだよね？」  
「せ…… 先輩……!」  
「1回はこっちでやってみたかったけど……  
まさか黒猫とできるなんてな……」  
京介が指にグッと力を入れると、  
黒猫のお尻の穴からミリ、ミリと音がして  
アナルプラグの本体が顔を見せ始めた。

「あ…… あぐ……っ!! いッ……イイイッ!!」

エッチの時だけは焦らずとすぐに素直になってかーいーなと  
しみじみ思う京介なのだった。

「可愛いよ、黒猫」  
「るるるりっ!!」  
人間としての名前を呼ばれてしまった黒猫は、  
一瞬肩が「みっ!」と震えた。

「今日はゆっくり時間かけて…… いっぱいひどい事したいなあ……」  
「ひっ、ひどい……って…… そ…… そんなの……っ!!」  
「今でも…… 充分…… ヒド……ひっ!!」  
京介は指の動き方を変えて、子宮口を指で  
グリグリと擦りはじめた。黒猫の腰がビクッ、ビクッと痙攣する。  
「しきゅう……ごお……!! そんなグリグリらめスス……!!」  
「子宮口の周り、他の我慢汁でヌルヌルだろ……」  
あ…… 今日が危険日だったら妊娠させられそうだなあ……  
「そっ、そんな事いわないれ……えっ!!」





ふほおお……っ!

と下品な音がして、  
黒猫のお尻に刺さっていたプラグが一気に抜ける。

プラグが抜けた後の穴はだらしく緩みきっていた。

「は…… は……!!!」

「……うっわ…… アナルガバガバになって……」

こんなブツといのどうやって入れたんだよ……」

京介が、わざと黒猫のアナルに龟头を出し入れする。

「あひゃっ、ひゃあああ……!! ちんぽ、感じひやうう……!!!」

「まったく…… どうしようもない淫乱だな、黒猫は……」

「ふああ……!」

「ほら、ローションなくても黒猫と俺の汁でチンポヌルヌルしてるぞ」

今度は、筆を途中まで出し入れする。

「あはっ、は…… は…… はアアアん!!!」

「どう、ここにチンポ突っ込むの初めてなんだろ?」

「あ、あたり前よ……おっ……!!!」

「どんな感じ? ユルユルのアナルにチンポ突っ込まれるのって……」

「はあ…… は……ア!

何か…… 変な感じだけど……っ

いっぱい出し入れされると気持ちい……

カリひつかかるの好き……

肛門めくれ……て気持ちイイの……っ」

「そっか、黒猫は根元までハメてブツ壊されるのが好きなんだな」

京介は、パンパンに膨らみきったペニスを

黒猫のアナルに一気に突き入れた。

「あはアアアあああっ!!!」

腰を動かす度に、黒猫の腰がビクン! ビクンと跳ねる。

「ほら、本気汁でポトポトのエロまんこ、

開いてちゃんと見せて」

「あっ♥あっ♥ ああああ!!!!」

「うっわ…… エロすぎっ…… チンポ突っ込む度、

膣口がバクッリ開いてヒクヒクしてんぜ……!」

「あっ! ああああん!!!!」

「ほらほら…… チンポでイカされたいんだろ……?」

黒猫、可愛くおねだりしてご馳……?」

「あっ、あにゃあああっ!」

み、見て、見て下さい、えっちな黒猫のまんこアナル見てっ

先陣とのセックスで感じてるとこ見て下さあああ……!!!!」

言い終わった後、顔を真っ赤にして

ぎゅ、と目を瞑る黒猫。

「……いいぜ、今日はケツ穴でイク黒猫、しっかり見てやるからな……!」

「あっ♥ あううん!!!!」



「んああああ!!! これ以上はらめええ……」  
「おく……!! お尻の奥壊れひゃうらう!!!」  
京介が激しく黒猫のアナルを突く度に、  
膣口から大量の愛液が溢れる。

「あーもう……っ そういう顔すると余計に燃えるんだけど……ツ」

「そ、そんな、演技なんてれきない……ものおお……!」

「はあ…… 確球のそういう所が好きだな……」

恥ずかしそうに顔を隠す黒猫。

その仕草に、京介のペニスは素直に硬くなった。

「ああ……! ちんぽ硬くなっひゃあ……ツ! 急に動かないで……!」

「あーっ……! イキぞ……! このコリコリい……!」

「確球…… アナルで出している?」

「せ…… せんぼっけい……!」

「おまんこに……っ! 子宮口……!」

「お尻からさきゅっ……る!!!!」

「確球……っ! イキぞ……っ 確球の奥に……っ!!!!  
精液……っ 出すぞ……!!」  
「ああああ……!!!! 先輩……!!!!  
もらってえ……! 私の事……全部……!!!!  
じゅっ、射精して、ザーメンびゅっびゅっしてえええ!!!!」

「イクッ♥ イくらうう!!!!!!!」

「はあ…… はあ……♥  
先輩の…… 精液…… いっぱい……」  
「は…… 気持ちよかった……」

ぐきゅるっ。

「うっ……!」  
その時、黒猫のお腹からアしな音がした。  
……それは、お腹を壊した時のものと、非常に良く似ていた。

「どうしよう先輩、お腹がグルグルいってる……  
……このままゴールド・エクスペリンスとかないわよね?」  
「なっ、ないぞ? ナシで寝むぞ!？」

……未完?











ミヤコトシキ  
クニニシキ...

ミヤコトシキ...  
クニニシキ...

ミヤコトシキ...

ミヤコトシキ...

ミヤコトシキ...

ミヤコトシキ...  
クニニシキ...

ミヤコトシキ...

ミヤコトシキ...  
クニニシキ...

ミヤコトシキ...  
クニニシキ...

ミヤコトシキ...

ミヤコトシキ...





ああ、  
メル組の  
裏番組でしよ  
バトル系  
魔法少女なんて  
今さら…  
(以下略)

お子様と  
大きなお友達と  
マニアとお無職と  
ニートしか  
見ない駄作…  
(以下略)



何よ私!!  
対するメル  
とれると思  
アタは本気  
判らないわ  
に

では、  
「コスプレ」で  
勝負をしましよ



ついてい  
わ…

うっ  
受けてあげよう  
じやない!!



ああー!!  
あつた!!  
じやない!!  
!?同じ

まさか  
本当に着て  
来るなんて  
ふっ…



GARIGARI32

アレマテオレマ  
小林由高

2011年01月16日 初版発行

alemateorema@rinku.zaq.ne.jp  
www.rinku.zaq.ne.jp/alemateorema

印刷 上野印刷所様♥  
www.ueno-p.co.jp/dojin/index.html

【今週のペンクリニックとか寝がりもって】  
形状悪形の体に貰った神経痛、どうにかならんかいの？

【今週のこっそり寝かしもって】  
よしゆごさん、足首をゴリョンといわす

【今週の下下履しもって】  
印刷所さんなすずすず〜、ズリズリ〜

"alemateorema"

かありさん♥(メンパインはプレイできましたか？お返)

よしゆごさん♥(炎退治に手を入れたんですけどね〜……お返)

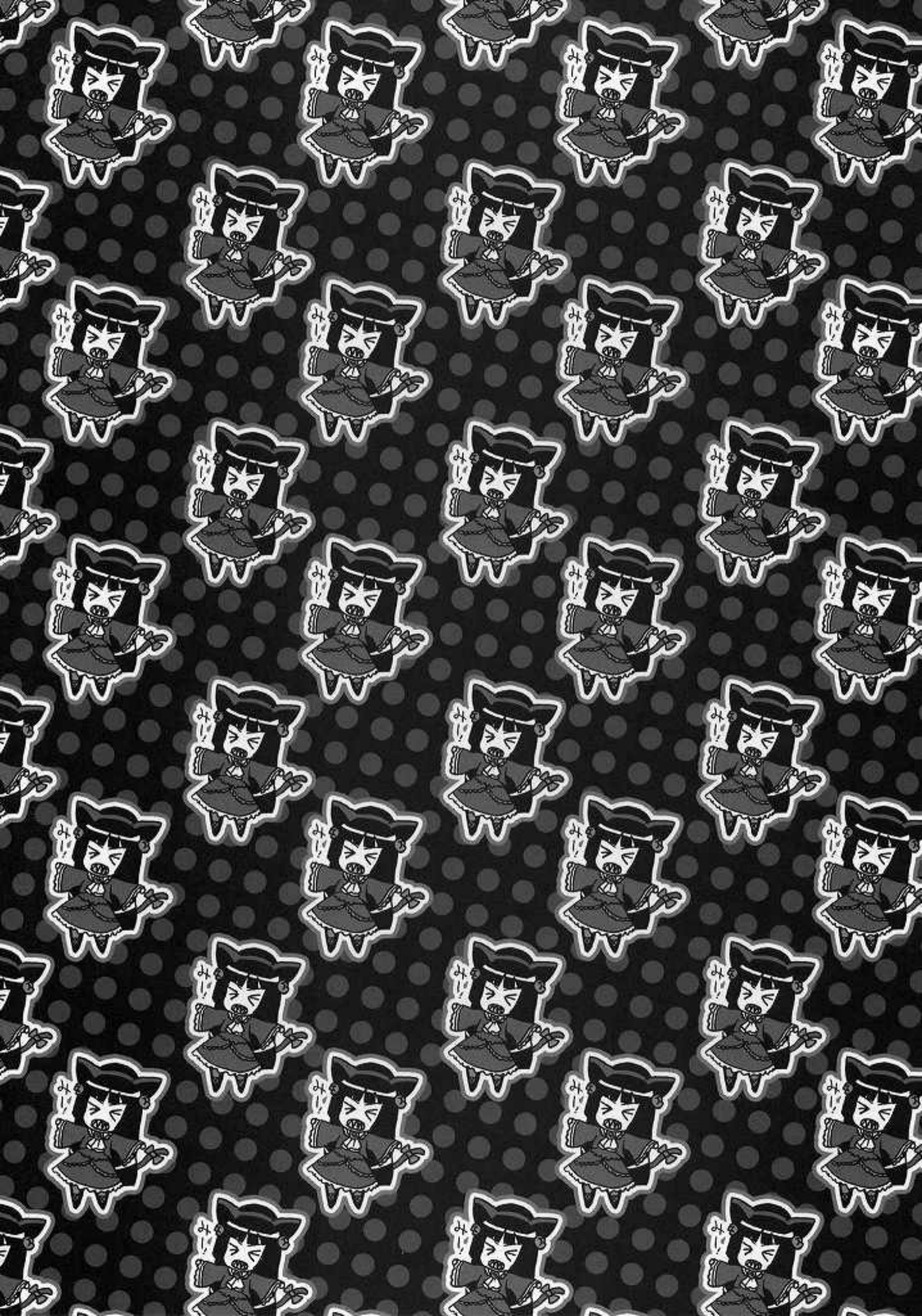
ユウコウ♥(この調子だと4月じゃの。まよ、クシの胸でたんと泣くが良い。お返)













[www.rinkuzaq.ne.jp/alemate@rima](http://www.rinkuzaq.ne.jp/alemate@rima)



alemate@rima  
901119011  
33